おと　さだ
乙貞

第248号　通巻43第３号
令和５（2023）年８月１日発行

守山市立埋蔵文化財センター
〒524－0212　守山市服部町2250番地
TEL＆Fax　077（585）4397
Mail　maizobunkazai@city.moriyama.lg.jp

暦のうえでは大暑、今は立秋前の土用の最中です。先月末の丑の日には、うなぎ料理を供する飲食店はさぞかし書入れに大わらわではなかったでしょうか。

さて、夏の土用の丑の日にうなぎを食して夏バテ防止とする食習慣は、江戸時代後期に時のインフルエンサー平賀源内、あるいは太田蜀山人の喧伝によって定着したとする説があります。しかし、土用の丑の日とうなぎの関係性は、万葉歌人の大伴家持も暑い夏を乗り切るにはうなぎを食べるとよい旨の歌を詠んでいること、春夏秋冬、四立前、春の土用戌の日は「い」のつくものや白いもの、夏は丑の日に「う」のつくもの、黒いもの、秋は辰の日に「た」のつくものや青いもの、冬は未の日に「ひ」のつくもの、赤いものを食べるとよいという言い伝えが古来よりあることを拠りどころにして、夏の土用丑の日はうなぎがチョイスされたようです。

「う」のつくウリやうどんでなく、暑い夏を乗り切るため、うなぎを美味しく食べる食文化に感謝したいと思います。

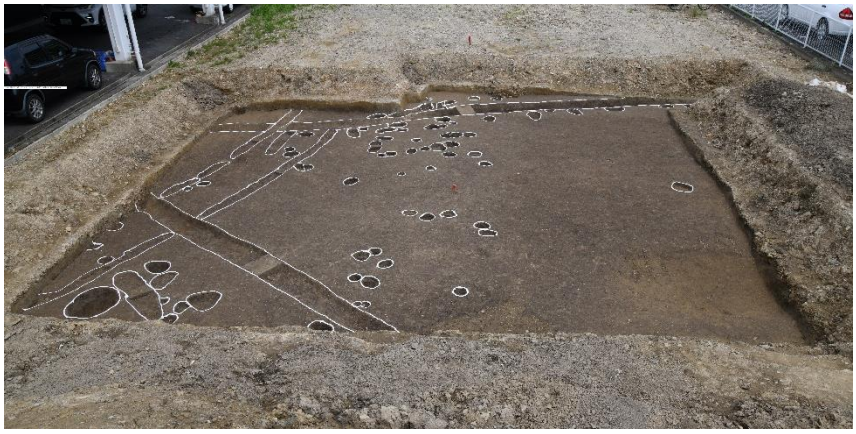
それでは、今号も発掘調査成果とセンター事業を紹介いたします。

発掘調査だより

益須寺関連遺跡第 40 次調査

第40次を数える今回の益須寺関連遺跡の調査は、吉身六丁目字園田において実施しました。

集合住宅建設工事に先立つ調査で、調査対象面積は約120㎡です。調査は6月19日から7月3日までの期間で実施しました。



調査地全景写真

この遺跡の名称は、『日本書紀』に記載された白鳳寺院・益須寺に由来します。持統天皇七年（693）、近江国益須郡の醴泉で病が治り、翌8年に褒美を与えたと記されています。益須寺の建立地は吉身七丁目周辺と推定され、その寺域を益須寺遺跡、寺院周辺の包蔵地を益須寺関連遺跡として周知されています。

SH-1、SD-2 検出写真

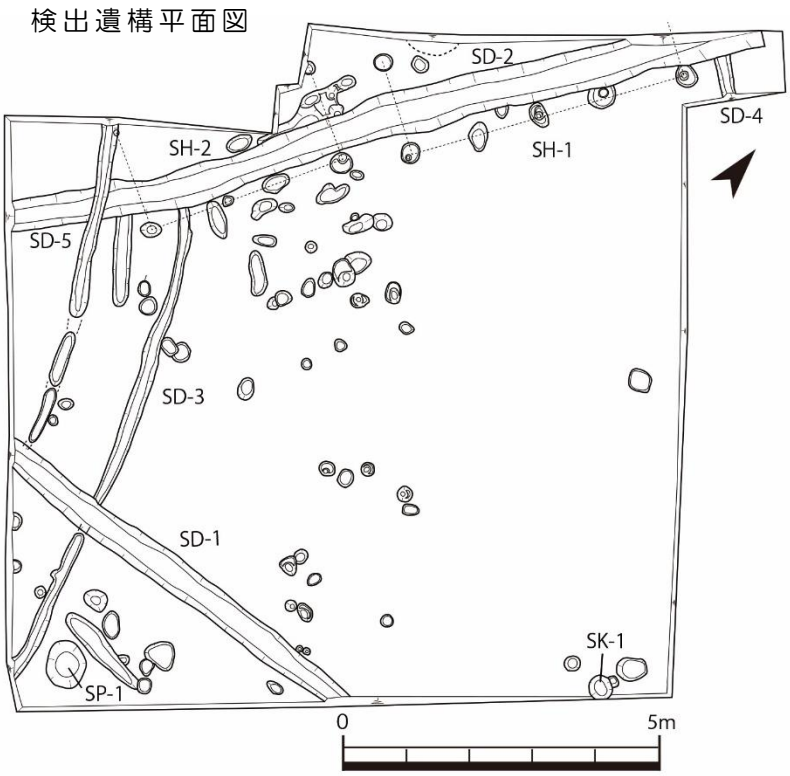
さて、今回の調査は地表から約90㎝の深さで、掘立柱建物２棟（SH-1、２）、土坑（SK-1）、溝5条（SD-1～５）と多数のピットを検出しました。まず、掘立柱建物SH-1、２は、ともに調査地北西辺で検出し、調査地外に伸長します。SH-1は４間×

１間以上、SH-2は３間×１間以上の規模で、ほぼ同一軸であることから同時期または、継起的な建物と考えられます。5条の溝のうち、SD-1は幅60㎝、深さ15㎝で、ほぼ東西方向に伸びる溝です。この溝の上層から8世紀初頭の須恵器坏蓋が出土しています。

SD-2は南北をやや東に偏る方位で伸びる溝で、その規模は幅70㎝、深さ20㎝、調査地北西辺でSH-1の柱穴に重層しています。土坑SK-1は直径50㎝、深さ50㎝を測り、上層は褐色系砂質土、下層は焼土、炭化物を混入する暗黄褐色砂質土を堆積しています。

また調査地南隅で検出したピットSP-1は、約70㎝の掘方を測り、埋土から8世紀初頭の須恵器甕、坏蓋が出土しています。調査地外に広がる掘立柱建物の角柱の可能性があります。

検出遺構平面図



以上が第40次調査の概要です。今回の調査では、土坑SK-1の検出に加え、包含層から鉄滓が出土していることから、益須寺周辺の集落で小鍛冶が行われていた可能性もあると考えられます。

（沖田）

吉身南遺跡第11次調査

7月初旬より、吉身南遺跡第11次調査を開始しました。調査地はライズヴィルつがやま跡地で、新たな建物建設に伴うものです。

かつて昭和の時代まで、守山駅西口は人々の鉄道乗降口で、その一帯は商業地域であったのに対し、東口一帯は物流を鉄道に直結させた工業地域という色分けがありました。

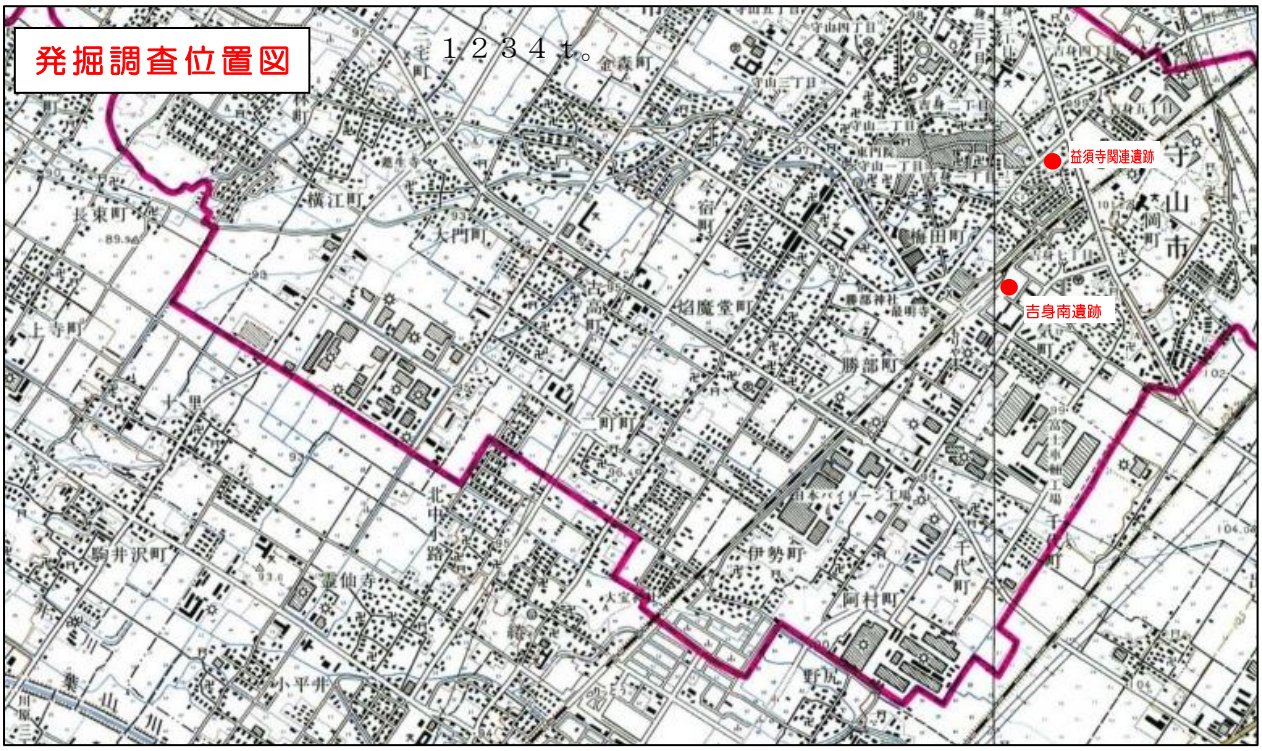
そのような土地利用の中、今回の調査地を含む駅東口一帯は、江州煉瓦(株)の工場地が占めていました。現在のグランドメゾンや旧ライズヴェルつがやまは、昭和47年（1972）に操業をやめた江州煉瓦(株)の工場跡地に建っています。

建物建設地の一部は、昭和54年（1979）につがやま荘（ライズヴェルつがやまの前身）の建設に伴って発掘調査を行っています。当初、煉瓦工場棟の基礎工事や煉瓦の採土によって遺構が残っていないと想定されていましたが、実際にはかなり残存していて、古墳時代後期の集落跡を調査することができました。

今回の調査も試掘で遺構が確認されたことにより実施したもので、7月下旬の段階で、溝、ピットとそれに伴い土師器、須恵器、臼玉が出土しています。次号乙貞で調査成果を報告いたします。

（畑本）

昭和54年実施調査風景



トピックス topics トピックス topics トピックス topics トピックス topics

歴史入門講座第１講・第２講を開催しました！

第1講は6月17日（土）、伴野幸一さん（守山市教育委員会）に「伊勢遺跡を俯瞰する」と題し講演していただきました。長年、伊勢遺跡の調査に携わってきた伴野さんは野洲川流域の弥生文化の到達点のひとつ、伊勢遺跡の大型建物群については、クニの政治中枢であったと考察されています。

今秋一般公開予定である史跡伊勢遺跡の地元伊勢町からも多くの皆様が受講され、聞き漏らさぬよう耳を傾けていました。

第１講受講風景

第２講受講風景

第２講は７月15日（土）に開催しました。講師を務めていただいた伊庭功さん（[公財] 滋賀県文化財保護協会）は県内では弥生土器研究の第一人者で、「土器からわかる近江の弥生文化」をテーマに講演していただきました。

講演内容は、ベーシックな土器の位置づけから始まり、弥生土器の変化とその背景、そして土器を通して、核心の野洲川流域の特質に言及されました。

伴野さん、伊庭さん、ご講演ありがとうございました。

なお、本年度の歴史入門講座は既に受講定員に達しましたため、申し込みをされた方以外は受講できません。ご了承いただきますようお願いいたします。（講座資料は受講者以外の方にも配布させていただきますので、希望される方は埋蔵文化財センターまでご連絡ください。）

秋 季 特 別 展 開 催 の お 知 ら せ

平成5年度秋季特別展は、『野洲川流域の弥生文化を探る』をテーマに、令和５年10月１日（日）～12月17日（日）の期間で開催します。

弥生時代前期、琵琶湖に程近い服部遺跡で稲作農耕が始まり、その後次第に内陸部にも広がります。中期には、農業共同体の発達によって環濠集落が下之郷遺跡に形成されます。そして後期になると、伊勢遺跡にクニの政治中枢とされる大型建物群が出現します。

野洲川流域の弥生遺跡はムラからクニへと統合に向かい、遂には原始国家誕生の胚胎に達した弥生社会を端的に語ることができます。

今回の特別展は、今秋、伊勢遺跡史跡公園の供用が開始されることに伴い、野洲川流域で育まれた弥生文化を理解していただくことを目的に開催するものです。

秋季講演会開催のお知らせ　　10月1日より受講受付を開始します！

日 時：令和５年11月18日(土)午後２時開講

演 題「近畿弥生社会からみた下之郷遺跡・伊勢遺跡」

講 師　森岡秀人氏（橿原考古学研究所共同研究員）

場 所　センター２階会議室　受講無料・定員60名　事前申し込みが必要です。

◆秋季講演会/埋蔵文化財センター友の会入会申込み先

守山市立埋蔵文化財センター　**077(585)4397**

これまでの乙貞や新着情報は、『歴史のまち守山』や Face Book からもご覧いただけます！

←歴史のまち守山はコチラから
http://moriyama-bunkazai.org

守山市立埋蔵文化財センターFacebook ページはコチラから▶
https://www.facebook.com/MaibunMoriyama/?ref=bookmarks

【後記】　乙貞では常套手段ですが、今号の冒頭文のオーバーフロー分を後記でも取り上げます。立春、立夏など四立前の18日間は土用、土用というと、夏の土用丑の日のうなぎが真っ先に思い浮かびますが、農業の傍ら造園業を営んでいた祖父が土用入りの間は剪定すら手をとめていたことも想起します。

土用の禁忌にある、草木の植え替えや伐採、除草などの土いじりを行ってはならないことに則ってのことです。そのような、かつての祖父のふるまいから園芸趣味のある筆者は今でも、土用の時期の植え替えや株分けは手をこまねいています。土用には、上記の土いじりや井戸掘り、増改築を行わないよう、土を司る土公神の祟りを嵩に懸けて戒めている他、非日常的な旅行や引っ越しなども避けるべきとして挙げられます。このような土用にまつわる禁忌からは、何かと体調を崩しやすい季節の変わり目はできるだけ、体への負荷を避け休息するようにという慮りを看取することができます。更には、土公神が天上界にいる間日（まび）を設け、間日の日ならば祟りなしとし、土仕事を生業にする植木職人などへの救済策も盛り込まれています。

立秋などの四立は古代中国の暦文化二十四節気に由来し、土用もまた、中国の五行思想に基づく暦の雑節です。日本への伝来後、四季の移ろいをよりリアルに写し出すようアジャストされたことにより、農耕に必要な季節感にとどまらず、人をはじめ生き物への配慮が盛り込まれています。土用の期間から間日を差っ引いた50日余りは先人の教えに従い、体を労わってみてはどうでしょうか。　（馬耳東風）